

流域

川国夫



流域

昭和五十年七月二十五日初版発行

昭和五十年八月二十五日再版発行

著者 小川国夫

発行者 中島隆之

発行所 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三の六

電話(〇三)(二九二)(三七一一) 振替東京一〇八〇二

印刷 三松堂印刷 製本 中西製本

KUNIO OGAWA © 1975

流域・目次

蛇 王	闇 の 力	夜 の 水 泳	消 え た 青 年	先 生 の 下 宿	酷 愛	心 臓
213	131	121	99	91	33	7

後
記

装画 田中恭吉
題字 小川国夫

流域

心

臟

房雄の母親が実家の法事に姉を連れて行った日、則子がやって来た。彼女は納屋の土間から階段を見上げて、

——房雄さん、上ってもいい、といった。

——下りて行く、と彼は理由もなくいら立って、いった。

彼の部屋は納屋の二階だった。階段へ駆け下りる彼は、体を揺らさないで、流れるようだった。則子は身を引いて、大戸のひなたから彼の足を見ていた。華奢でしなやかな足が、一段一段のへりを擦っているようだった。彼の体ではそこだけが動いていた。それが見ることを強制するようで、彼女は叫び声をあげそうになった。

——レコード聞いてたの……、と彼女はいった。

——かけてただけさ。

——聞いてなかったの。

——聞いてなかった。絵を描いていたんだ。

——いつもレコードかけて絵を描くの……。

——いつもってわけじゃあない。

——わたしの声、判った……。

——判った。

彼女はここへ来ながら、登り道で、上から来る綾子と出会った。二人の会話に房雄は耳を澄ましていた。則子の声は、瀬にいる鮎のように、とりとめなくちらつき、彼をいらいらさせた。それから、静かな水に鮎が丸ごと見えたように、その声は聞こえた。鮎は彼が想像で追っていた位置とは少し違った所において、いきなり間近かに現れた感じだった。

——綾子さんと話していたろう。

——そうよ。

——君の声と彼女の声は違うな。

——当り前じゃない。

——彼女の声は顔へ響くんだ。

——顔……、顔って、房雄さんの顔……。

——綾子さんの顔さ。

——どういう意味。

——彼女の声は共鳴がいい。顔へ響いた声ってそうさ。

……………。

——きれいな声なんだ。

彼女は身構えるようにした。背が少し伸びた感じだった。房雄の眼はもっと高くにあった。庇の灰色の影の中で暗く、奥にいら立ちが行き来していた。

——この人には自分で自分を噛んでいる時がある、と則子は思った。

彼がからかっているのではなく、いやがらせの勢いを自分でもてあましていることが、彼女には解った。

——でも、きれいな眼だ。……わたしは、来てはいけなかった、と彼女は思った。

そして、朝から危い感じだった自分が、とうとう引き裂かれてしまった、と思った。

——綾子さんなら下へ行ったわ、水がついた親戚の手伝いだって。

……………。

——そんなふうにいるもんじゃないわ、わたしの前で。

彼は則子の顫え声に挑撥される気がした。

——水はどうだった、君の所じゃあ。

——これ返す。

彼女は彼から借りた本を、手提げ籠の中から擱んで、突き出した。彼は面倒臭そうに受け取った。

——あなた、時々変だわ。

——そうだろう。病気なんだ。

彼には彼女の眼の中に、抗って来る腫が見えた。それが刺すようで、彼には爽やかな痛みが感じられる気がした。しかし彼は、

——この眼は怒って興奮することはあっても、ひとを怒らせる術^{すべ}を知らない、と思った。

貝殻の形の小鼻がふくらんで動いているのや、下顎の硬くすべすべした窪みが、ハズミできわ立つのまで、彼には見えた。

則子は髪をゆすつて槇垣の門の方を向き、ゆるい下りになっている敷石道を、通りへ出て行つた。そこで曲る時、横顔が深い緑の中に見えた。

彼女が行つてしまうと、蟬の鳴き声と瀬の音が残った。裏山の林を吹き抜ける、湿った風のコースが判つた。彼は高い林を見た。梢をかすめて、白い雲がもつれながら走っていた、その動きに追いつて立てられているような、則子の後姿が見える気がした。

彼はうつろな気持で、微かな物音にも神経質に唸る獣に似た恰好で、大戸へ出て行つた。雲の影は、薄黒い流水のようだった。彼は、嵐で倒れて、そのせいで余計はなやかになった花畑へ行き、白い蘭をむしつかいだ。腋にはさんだ本が土に落ちた。彼はもう一度蘭をむしってから、それを拾った。泥がついていた。カミユの《異邦人》だった。彼は表紙を持って本をブラ下げ、納屋の階段に乗せた。蘭を牛乳壺に差すと、釣り合いがよかった。彼は二階へ行つて絵を描き続けようと思ったが、行く手を塞いだ恰好の泥まみれの本と、真珠色に光っている花卉を見た。そして、心を変えて、木の内戸を開き、材木置場へ入って行つた。

納屋の母屋に近い半分には二階があつたが、門に近い半分は、土間から棟木まで

一つの空間だった。彼の祖父が材木問屋をやっていた時代には、そこに垂木や板や角材がたてかけてあって、檜のからい匂いがしていたものだ。今は五六本の鋤と鍬のほかに、三番茶を詰めた籠が二つと、自転車と空気入れのポンプが置いてあるだけだった。

梁には一羽鼻がいた。そこには、寝臭い夜気が残っている感じだった。鼻は一度光の筋の中へ現れ、梁の上の柔毛をユラユラ落して、影の中へいざって行った。房雄が戸を閉めると、鼻は黒い影になって、剝製のように動かなかった。ただ緑色の眼が光っていた。房雄はそこを見つめた。燐のような眼が宙に浮き上がり、闇をただよった。やがて緑色の光は消えた。

——ゴロッチョ、この神経衰弱、と彼は笑いながらいった。

則子の眼が見えた。白眼が青く冴え、瞳孔のまっすぐな深さが感じられる気がした。あの眼に確かめたいものがある、なん度見ても見切れないものが、あそこにはある、と彼には思えた。

——時々変になる、か、と彼は呟いた。

彼は道路側の戸を開けた。半影のあたりをまた鼻の柔毛が落ちて行ったが、彼は